

子ども・子育てに関する社会保障、社会福祉、隣接領域からの総合的研究

松村 智史

(人間文化研究科 准教授)

matsumura@hum.nagoya-cu.ac.jp

1 研究の関心・領域

私は、子ども・子育てに関する政策や取組を、社会保障・社会福祉の視点を中心にしつつ、隣接領域（行政学、教育学、社会学、法学など）の視点も含めて、多角的・多層的に研究しています。

子ども・子育てといっても、例えば、国会・行政が立案した政策から、地域の民間のNPOの実践現場での取組まで、非常に多岐に渡ります。

学際的な視点から研究することで、その実像を、様々な角度からとらえ、ひとつの視点からでは見えてこない、多様な姿、面白さ、奥深さ、課題点を浮かび上がらせることを心がけています。

子ども・子育ては、多彩な学問領域にまたがるだけでなく、社会の様々なフィールドで、相互に影響し合いながら日々生起・変容し、社会を生きる様々な人々の知や思いを体現し、過去・現在・将来と長期的な時間軸にまたがる、壮大な絵巻物や万華鏡のようなものです。

その全貌に少しでも近づけるように、研究を続けています。

2 主要な業績

松村智史著（単著）、2020年11月刊行、明石書店

『子どもの貧困対策としての学習支援によるケアとレジリエンス：理論・政策・実証分析から』

(概要)

本書は、貧困世帯の子どもへの学習支援を、「ケア」の視点から捉え直し、その理論上・政策上の意義や位置づけを分析したものである。分析の結果、学習支援による「ケア」の側面から学習支援を捉える、「学習支援によるケア」という概念を新たに提示し、その作用によって、子どもに、自己肯定感など多面的効果がもたらされうることを導き出した。また、インタビュー調査から、「学習支援によるケア」の作用として、【誰かに気にかけてもらう感覚】、【居場所感】、【頼れる大人に会える】などの複合的な要因を析出した。

今後ますます取組が加速することが期待される、学習支援や子ども・子育てのあり方について、「ケア」の視点から捉え直し、「ケア」を中心に位置づけることの重要性を示すものである。